

「金瓶梅」各回の回目と標題詩について

——「金瓶梅」の作者像をめぐって——

荒 木 猛

〔抄録〕

明代に刊行された「金瓶梅」には、うちに「水滸伝」の影響を色濃く残す「金瓶梅詞話」と、それにいろいろと手を加え作品としてより完成度の向上に務めた「新刻繡像批評金瓶梅」の兩種の版本がある。この兩種の版本にはさまざまな相違があるが、中でも、回目と標題詩の違いが顕著である。本稿は、この回目と標題

詩にどのような違いがあるかを解明し、少なくとも、この兩種の版本の編者は同一人物ではなかったであろうことを論じた。

キーワード 「金瓶梅詞話」本、「新刻繡像批評金瓶梅」本、回目、

標題詩、作者像

はじめに

知られる通り、「金瓶梅」には、(一)「金瓶梅詞話」(万曆四十五年序)本(以下「詞話本」と略称する)、(二)「新刻繡像批評金瓶梅」(以下「繡像本」と略称する)、(三)「第一奇書」(清康熙年間刊)本の三種の版本が現存する。

このうち、(一)の「詞話本」と(二)の「繡像本」との間には、主に以下のような違いがある。

(1)、各回の回目および標題詩の大部分が違う。

- (2)、第一回および第五十三・五十四回の大部分がまったく異なる。
- (3)、「詞話本」八十四回では、呉月娘が泰山に參籠しての帰り、清風山の山寨に拉致され、その頭目の王英に手ごめにされかけるのを、その場に居合わせた宋江がとめて事なきを得るといふ個所があるが、「繡像本」では、この部分が削られている。
- (4)、「詞話本」に見える長い上奏文や道士の祈禱文・尼僧の説教・妓女の歌う唄などの大部分を、「繡像本」の同回では削っている。
- (5)、「詞話本」には、誤字・当て字が多い外、脱文・衍文などがあるが、読みにくいのだが、「繡像本」では、それらの個所がすべて正しく

改められ、読みやすくなっている。

(6)、「繡像本」には、各回にそれぞれ二葉づつ、計二百葉の挿図がつけられている。

さて、本小考は、このうち(1)の各回の回目と標題詩の違いに着目し、それがどう異なるかを考察した上で、「金瓶梅」の作者像に接近することを目的とする。今、「金瓶梅」の作者像と書いたが、「金瓶梅」の草稿を執筆した人は誰だったのか、これまでいろんな説が出されているが、定説を見ていない。筆者がここで「金瓶梅」の作者と言う場合、この草稿を書いた人（今仮にこれを×とする）の外に、「詞話本」を編刊した人（今仮にこれをYとする）や、「繡像本」を編刊した人（今仮にこれをZとする）を含むおおざっぱな呼称であることを予めおことわりしておきたい。何故このようにおおざっぱに称したかと言うと、現在の所、Xが誰なのか不明であるばかりでなく、YもZも不明なのである。従って、XとYとZが同一人物の可能性があると同時に、XとYとZが三人以上のこともあれば、XとYが同一人物だが、Zは異なるという可能性もある。要するに、作者と編刊者に関して一切が不明なので、とりあえず、XYZをひっくるめて「金瓶梅」の作者と称するわけである。

ところで、さきにあげた「詞話本」と「繡像本」の相違のうちの(1)について考察してゆくうちに、やはりYとZとは別人ではないかと考へるに至った。今回、各回の回目と標題詩を通じて、YとZのこの作品に対する考え方の相違や嗜好の相違というものを考察してみたい。

一、回目の相違について

回目とは、章回小説の各回冒頭にかかげられた題目のことで、おおむね七言二句ないし八言二句からなっており、それぞれの各句は、その回の二つの大きなヤマ場に対応しているとされる。「詞話本」と「繡像本」とでは、回目にもし相違があったら、各版本の編刊者がその回のヤマ場のとらえ方に相違があったことを意味する。そこにはいかなる違いがあるか、その違いに何か傾向が見られるか、見られるとしたらそれはいかなる傾向かを考えてみたい。このことを考える前に、まず「詞話本」と「繡像本」の回目を対照してみよう。そこで作成したのが次の表Iである。

表I

回数	詞話本	繡像本
1回	景陽岡武松打虎 潘金蓮嫌夫売風月	西門慶熟結十弟兄 武二郎冷遇親哥嫂
2回	西門慶簾下遇金蓮 王婆子貪賄説風情	俏潘娘簾下勾情 老王婆茶坊説技
3回	王婆定十件挨光計 西門慶茶房戲金蓮	定挨光王婆受賄 設圈套浪子私挑
4回	淫婦背武大偷姦 鄆哥不憤鬧茶肆	赴巫山潘氏幽飲 鬧茶坊鄆哥義憤
5回	鄆哥幫捉罵王婆 淫婦葉酖武大郎	捉奸情鄆哥定計 飲酖葉武大遭殃
6回	西門慶買囑何九 王婆打酒遇大雨	何九受賄瞞天 王婆幫問遇雨

7回	薛嫂兒說娶孟玉樓 楊姑娘氣罵張四舅	薛媒婆說娶孟三兒 楊姑娘氣罵張四舅	×	22回	西門慶私淫來旺婦 春梅正色罵李銘	蕙蓮兒偷期蒙愛 春梅姐正色閑邪
8回	潘金蓮永夜盼西門慶 燒夫靈和尚聽淫声	盼情郎佳人占鬼卦 燒夫靈和尚聽淫声	×	23回	玉簫觀風賽月房 金蓮竊聽藏春塢	賭棋枰瓶兒輸鈔 顯藏春潘氏潛踪
9回	西門慶計娶潘金蓮 武都頭誤打李外伝	西門慶偷娶潘金蓮 武都頭誤打李皂隸	⊗	24回	經濟元夜戲嬌姿 惠祥怒詈來旺婦	敬濟元夜戲嬌姿 惠祥怒詈來旺婦
10回	武二充配孟州道 妻妾宴賞芙蓉亭	義士充配孟州道 妻妾飮賞芙蓉亭	⊗	25回	雪娥透露蝶蜂情 來旺醉謗西門慶	吳月娘春昼鞦韆 來旺兒醉中謗註
11回	潘金蓮激打孫雪娥 西門慶梳篦李桂姐	潘金蓮激打孫雪娥 西門慶梳篦李桂姐	⊗	26回	來旺兒遞解徐州 宋惠蓮含羞白縊	來旺兒遞解徐州 宋惠蓮含羞白縊
12回	潘金蓮私僕受辱 劉理量魔勝貪財	潘金蓮私僕受辱 劉理量魔勝求財	⊗	27回	李瓶兒私語翡翠軒 潘金蓮醉鬧葡萄架	李瓶兒私語翡翠軒 潘金蓮醉鬧葡萄架
13回	李瓶兒隔牆密約 迎春女窺隙偷光	李瓶兒墻頭密約 迎春兒隙底私窺	⊗	28回	陳經濟因鞋戲金蓮 西門慶怒打鉄棍兒	陳敬濟微倖得金蓮 西門慶糊塗打鉄棍
14回	花子虛因氣喪身 李瓶兒送奸赴会	花子虛因氣喪身 李瓶兒迎奸赴会	⊗	29回	吳神仙貴賤相人 潘金蓮蘭湯午戰	吳神仙冰鑑定終身 潘金蓮蘭湯邀午戰
15回	佳人笑賞翫月樓 狎客幫闖麗春院	佳人笑賞翫燈樓 狎客幫嫖麗春院	×	30回	來保押送生辰担 西門慶生子喜加官	蔡太師擅恩錫爵 西門慶生子加官
16回	西門慶謀財娶婦 應伯爵喜慶追歡	西門慶折吉佳期 應伯爵追歡喜慶	⊗	31回	琴童藏葷藏玉簫 門慶開宴吃喜酒	琴童兒藏葷構鸞 西門開宴為歡
17回	字給事劾倒楊提督 李瓶兒招贅蔣竹山	字給事劾倒楊提督 李瓶兒許嫁蔣竹山	⊗	32回	李桂姐拜娘認女 應伯爵打渾趨時	李桂姐趨炎認女 潘金蓮懷嫉驚兒
18回	來保上東京幹事 陳經濟花園管工	賄相府西門脫禍 見嬌娘敬消酒魂	⊗	33回	陳經濟失輪罰唱 韓道国縱婦爭鋒	陳敬濟失輪罰唱 韓道国縱婦爭鋒
19回	草裡蛇邏打蔣竹山 李瓶兒情感西門慶	草裏蛇邏打蔣竹山 李瓶兒情感西門慶	⊗	34回	書童兒因寵攬事 平安兒含恨截舌	獻芳樽內室乞恩 受私賄後庭說事
20回	孟玉樓義勸吳月娘 西門慶大鬧麗春院	優閒間趨奉鬧華筵 痴子弟爭鋒毀花院	⊗	35回	西門慶挾恨責平安 書童兒粧且勸狎客	西門慶為男寵報仇 書童兒作女粧媚客
21回	吳月娘掃雪烹茶 應伯爵替花勾使	吳月娘掃雪烹茶 應伯爵替花邀酒	⊗	36回	翟謙寄書尋女子 西門慶結交蔡状元	翟管家寄書尋女子 蔡状元留飲借盤纏

37回	馮媽媽說嫁韓氏女
38回	西門慶包占王六兒
39回	西門慶夜打二搗鬼
40回	潘金蓮雪夜弄琵琶
41回	西門慶玉皇廟打醮
42回	吳月娘聽尼僧說經
43回	抱孩童瓶兒希寵
44回	粧丫鬢金蓮市愛
45回	西門慶與喬大戶結親
46回	潘金蓮共李瓶兒鬪氣
47回	豪家攔門玩烟火
48回	貴家高樓醉賞燈
49回	為失金西門慶罵金蓮
50回	因結親月娘會喬太太
51回	吳月娘留宿李桂姐
	西門慶醉拶夏花兒
	桂姐央留夏花兒
	月娘含怒罵玳安
	元夜游行遇雪雨
	妻妾笑卜龜兒卦
	王六兒說事凶財
	西門慶受賊枉法
	曾御史參劾提刑官
	蔡太師奏行七件事
	西門慶迎請宋巡按
	永福寺餞行遇胡僧
	琴童潛聽燕鶯歡
	玳安嬉游蝴蝶巷
	月娘聽演金剛科
	桂姐躲住西門宅

馮媽媽說嫁韓愛姐	西門慶包占王六兒	王六兒棒槌打搗鬼	潘金蓮雪夜弄琵琶	寄法名官哥穿道服	散生日敬濟拜冤家	抱孩童瓶兒希寵	粧丫鬢金蓮市愛	兩孩兒聯姻共笑嬉	二佳人憤深同氣苦	逞豪華門前放烟火	賞元宵樓上醉花燈	爭寵愛金蓮惹氣	亮富貴吳月攀親	避馬房侍女偷金	下象棋佳人消夜	応伯爵勸當銅鑼	李瓶兒解衣銀姐	元夜游行遇雪雨	妻妾戲笑卜龜兒	苗青貪財害主	西門枉法受賄	弄私情戲贈一枝桃	走捷徑探席七件事	請巡按屈体求榮	遇胡僧現身施藥	琴童潛聽燕鶯歡	玳安嬉游蝴蝶巷	打猫兒金蓮品玉	聞葉子敬濟輸金
----------	----------	----------	----------	----------	----------	---------	---------	----------	----------	----------	----------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	--------	--------	----------	----------	---------	---------	---------	---------	---------	---------

52回	応伯爵山洞戲春嬌
53回	潘金蓮花園看莫茹
54回	吳月娘承歡求子息
55回	李瓶兒酬願保兒童
56回	応伯爵郊園會諸友
57回	任医官豪家看病症
58回	西門慶東京慶寿旦
59回	苗員外楊州送歌童
60回	西門慶周濟常時節
61回	應伯爵舉薦水秀才
62回	道長老募修永福寺
63回	薛姑子勸捨陀羅經
64回	懷妬忌金蓮打秋菊
65回	乞蠟肉磨鏡叟訴冤
66回	西門慶摔死雪獅子
	李瓶兒痛哭官哥兒
	李瓶兒因氣惹病
	西門慶立段舖開張
	韓道国筵請西門慶
	李瓶兒苦痛宴重陽
	潘道士解禳祭燈法
	西門慶大哭李瓶兒
	親朋祭奠開筵宴
	西門慶觀戲感李瓶
	玉簫跪央潘金蓮
	合衛官祭富室娘
	吳道官迎殯頌真容
	宋御史結豪請六黃
	翟管家寄書致賄
	黃真人煉度薦亡

応伯爵山洞戲春嬌	潘金蓮花園調愛婿	潘金蓮驚散幽歡	吳月娘拜求子息	応伯爵隔花戲金釧	任医官垂帳診瓶兒	西門慶兩番慶寿旦	苗員外一諾送歌童	西門慶捐金助朋友	常時節得鈔做妻兒	開緣簿千金喜捨	戲雕欄一笑回嗔	潘金蓮打狗傷人	孟玉樓周貧磨鏡	西門慶露陽驚愛月	李瓶兒睹物哭官哥	李瓶兒病纏死孽	西門慶官作生涯	西門慶乘醉燒陰戶	李瓶兒帶病宴重陽	潘道士法遣黃巾士	西門慶大哭李瓶兒	韓画士伝真作遺愛	西門慶觀戲動深悲	玉簫跪受三章約	書童私挂一帆風	願同穴一時喪礼盛	守孤靈半夜口脂香	翟管家寄書致賄	黃真人爇牒薦亡
----------	----------	---------	---------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	---------	---------	---------	---------	----------	----------	---------	---------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	---------	---------	----------	----------	---------	---------

67回	西門慶書房賞雪		西門慶書房賞雪	
68回	李瓶兒夢斷幽情		李瓶兒夢訴幽情	
69回	鄭月兒充俏透密意	×	應伯爵戲嘲玉臂	
70回	玳安慫恿尋文嫂		玳安兒密訪蜂媒	
71回	文嫂通情林太太		招宣府初調林太太	
72回	王三官中詐求奸	⊗	麗春院驚走王三官	
73回	西門慶工完陞級	⊗	老太監引酌朝房	
74回	群寮庭參朱太尉	⊗	二提刑庭參太尉	
75回	李瓶兒何千戶家托夢	⊗	李瓶兒何家托夢	
76回	提刑官引奏朝儀	×	提刑官引奏朝儀	
77回	王三官拜西門為義父	×	潘金蓮揮打如意兒	
78回	應伯爵替李銘釈免		王三官義拜西門慶	
79回	潘金蓮不憤憶吹簫		潘金蓮不憤憶吹簫	
80回	郁大姐夜唱鬧五更		西門慶新試白綾帶	
81回	宋御史索求八仙鼎		潘金蓮香腮偎玉	
	吳月娘聽宣王氏卷		薛姑子佛口談經	
	春梅毀罵申二姐		因抱恙玉姐含酸	
	玉簫遡言潘金蓮		為護短金蓮潑醋	
	孟玉樓解慍吳月娘		春梅姐嬌撒西門慶	
	西門慶斥逐温葵軒		画童兒哭寐温葵軒	
	西門慶踏雪訪鄭月		西門慶踏雪訪愛月	
	賁四嫂倚脯盼佳期		賁四嫂帶水戰情郎	
	西門慶兩戰林太太	⊗	林太太駕轎再戰	
	吳月娘翫燈請黃氏		如意兒莖露獨嘗	
	西門慶貪慾得病		西門慶貪慾喪命	
	吳月娘墓生產子		吳月娘喪偶生兒	
	陳經濟竊玉偷香		潘金蓮售色赴東床	
	李嬌兒盜財掃院		李嬌兒盜財掃院	
	韓道國拐財倚勢		韓道國拐財遠遁	
	湯米保欺主背恩		湯米保欺主背恩	
82回			潘金蓮月下偷期	
83回			陳經濟画樓双美	
84回			秋菊含恨泄幽情	
85回			春梅寄柬諧佳会	
86回			吳月娘大鬧碧霞宮	
87回			宋公明義积清風寨	
88回			月娘識破金蓮奸情	
89回			薛嫂月夜壳春梅	
90回			雪娥毆打陳經濟	
91回			王婆子貪財受報	
92回			王婆子貪財受報	
93回			武都頭殺嫂祭兄	
94回			潘金蓮托夢守禦府	
95回			吳月娘布福募緣僧	
96回			清明節寡婦上新墳	
			吳月娘悞入永福寺	
			來旺盜拐孫雪娥	
			雪娥官壳守備府	
			孟玉樓愛嫁李衙內	
			李衙內怒打玉簪兒	
			陳經濟被陷敵州府	
			吳月娘大鬧授官庁	
			王杏庵仗義賙貧	
			任道士因財惹禍	
			劉二醉毆陳經濟	
			酒家店雪娥為娼	
			平安偷盜假当物	
			薛嫂喬計說人情	
			春梅游玩旧家池館	
			守備使張勝尋經濟	
			陳敬濟弄一得双	
			潘金蓮熱心冷面	
			秋菊含恨泄幽情	
			春梅寄柬諧佳会	
			吳月娘大鬧碧霞宮	
			普靜師化緣雪潤洞	
			吳月娘識破姦情	
			春梅姐不垂別淚	
			雪娥毆打陳敬濟	
			金蓮解渴王潮兒	
			王婆子貪財忘禍	
			武都頭殺嫂祭兄	
			陳敬濟感旧祭金蓮	
			龐大姐埋屍托張勝	
			清明節寡婦上新墳	
			永福寺夫人逢故主	
			來旺盜拐孫雪娥	
			雪娥受辱守備府	
			孟玉樓愛嫁李衙內	
			李衙內怒打玉簪兒	
			陳敬濟被陷敵州府	
			吳月娘大鬧授官庁	
			王杏庵義恤貧兒	
			金道士躑淫少弟	
			大酒樓劉二撒潑	
			酒家店雪娥為娼	
			玳安兒竊玉成婚	
			吳典恩負心被辱	
			春梅姐游玩家池館	
			楊光彦作当面豺狼	

97回	經濟守禦府用事 薛嫂買壳說姻親 陳經濟臨清開大店	假弟妹暗統鸞膠 真夫婦明諧花燭 陳經濟臨清逢旧識
98回	韓愛姐翠館遇情郎 劉二醉罵王六兒 張勝忿殺陳經濟	韓愛姐翠館遇情郎 劉二醉罵王六兒 張勝竊聽陳敬濟
99回	韓愛姐湖州尋父 普靜師薦拔群冤	韓愛姐路遇二搗鬼 普靜師幻度孝哥兒
100回		

（注、中国の旧白話小説の回目は、往々、目次に書かれているものと、各回冒頭につけられているものと異なることが多いが、以上表Iで挙げたものは、各回冒頭に掲げられたものであることをお断りしておきたい。尚、表中で示した㊦は、両句の対仗が整っていないことを、×は、字数が不揃いでかつ対仗が整っていないことを、それぞれ示す。）

表を見てもわかる通り、27回の「李瓶児翡翠軒に私話し、潘金蓮酔うて葡萄架を鬧す」のように、「詞話本」と「繡像本」とでは、一字一句同じものがある外、若干字句が異なっているも結局同じことを指しているものがある。今、これから、それ以外の回目が「詞話本」と「繡像本」とでは、どう違っているかを検討するわけだが、但し、紙幅の関係上そのすべてを提示するのはやめて、その回目の変更は何らかの意味が認められるものについてのみ考えることとしたい。

第一回

詞話本 景陽岡武松打虎 潘金蓮嫌夫壳風月
繡像本 西門慶熱結十弟兄 武二郎冷遇親哥嫂

回目がこのように違うのは、「詞話本」の書きだしが、「水滸伝」23回から26回までの武松物語に基づき、武松打虎から始まっているのに対し、「繡像本」の方は、いわばこの小説の主人公に相当する西門慶をまず最初に登場させ、「三国志通俗演義」の書きだし「宴桃園豪傑三結義」をまね、遊び仲間達と義兄弟の契りを結ぶという出だしにしたからである。「詞話本」は、まだ「水滸伝」からの影響を脱しきれないのに対し、「繡像本」の方は、より作品としての構成に意を用い、かく改められたものと考えられる。

第十八回

詞話本 来保上東京幹事 陳經濟花園管工
繡像本 賄相府西門脱禍 見嬌娘敬濟消魂

前十七回において、都での宇文虚中の弾劾により、西門慶の娘婿の陳經濟が西門大姐とともに西門家に転がり込む。西門家で居候となった陳經濟は、庭の整備工事の監督をまかされる。しかし、この回で重要なことは、この經濟が潘金蓮と始めて顔をあわし、以降二人は恋仲となり、西門慶の存命中は慶の目を盗んではこっそりあいびきし、慶の死後に二人は結ばれる。つまり、陳經濟と潘金蓮の出会いということの方がこの回では重要な点である。「繡像本」の回目の方がしつかりこの点を踏まえていると言えるし、また後に説くように、「繡像

本」は特に敬済と金蓮の關係を重視する。

第三十二回

詞話本 李桂姐拜娘認女 応伯爵打渾趨時

繡像本 李桂姐趨炎認女 潘金蓮懷嫉驚兒

この回は、前回にひき続き官哥生誕一ヶ月祝いの宴席の描写があり、この席で、妓女の李桂姐が望んで呉月娘の義理の娘となり、また、その席に招かれた応伯爵がいろいろとふざけたことをしゃべってまわりを喜ばす。回の終り頃において、かねてから西門慶の子供を産んだ李瓶児に対して強い嫉妬心を懐いていた金蓮が、その子供の官哥を高くもち上げ驚かす。為に官哥はびっくりして発熱する。これが後の官哥と李瓶児の死につながる。「繡像本」の回目の方が、上記のように、李瓶児やその子官哥に対する嫉妬心を持つ潘金蓮の行動をより重視していると言える。

第四十八回

詞話本 曾御史參劾提刑官 蔡太師奏行七件事

繡像本 弄私情戲贈一枝桃 走捷徑探婦七件事

この回は、前回の苗天秀殺害事件と、その主人を殺した下男の苗青が西門慶に賄賂を贈って刑を免れ釈放されるという話をうけて展開する。西門慶が賄賂をとって法をまげたことが、清廉潔白で正義感の強い巡按山東監察御史の曾孝序の知るところとなり、遂に彼は西門慶ら弾劾の上奏を行う。この弾劾文を邸報を見て知った西門慶は大いに慌

て、早速下男の来保と夏寿を都の蔡太師のもとに派遣し、もみ消しの運動を図る。都の太師邸では執事の翟謙が応対に出て、曾巡按からの弾劾文はまだ届いていないが、届いた時は、握りつぶして天子に見せないと答え、更に、近頃蔡太師の上奏した政治上の七つの改革案が天子の嘉納する所となり、裁下の聖旨がおりたとも言ふ。来保らはそのようなホットなニュースを仕入れて山東清河県に舞いもどる。これよりさき、折から清明節にあたり、西門慶は親戚一同を引き連れ城外の西門家の墓所へ墓参りにゆき、その折銅鑼や太鼓の音に官哥がおびえたとか、例によって、金蓮と陳經濟が人目を盗んでは抱きあつたりキスをしたりしていちゃついたとかといったことが書かれている。

さてこの回の回目を見ると、「詞話本」の方は、曾御史の弾劾と蔡太師の上奏といったように、どちらも政治動向というものにより視点をむけている。これに対し、「繡像本」の方は、まず「捷徑を走りて七件事の事を探婦す」とは、来保らが世間よりも早く蔡京の政治改革案を知ったことを指すのに対し、あとの一句の「私情を弄して一枝桃を戲贈す」とは、潘金蓮が人目のない所でこっそりと陳經濟の帽子の上に桃の枝を環にしたものをかぶせたことを指す。この回の回目には、「詞話本」の編者と「繡像本」の編者の嗜好の相違が明瞭に表われているように思われる。つまり、「詞話本」の編者は政治的動向を重視するのに対し、「繡像本」の編者はそれ以上に男女關係、特に潘金蓮と陳經濟の關係の方に強い関心を寄せているのである。

第五十三回

詞話本 吳月娘承歡求子媳 李瓶兒酬願保兒童

繡像本 潘金蓮驚散幽歡 吳月娘拜求子息

この回では、1、吳月娘が薛尼からもらった「種子靈丹」という怪しげな薬を服用して夫の慶との性交を待ちうけ、子供が授かることを天に祈る。2、官哥は、人事不省となり、灼龜師や祈禱師らをよんで願ほじきをする。3、そうしたドサクサの間に、またはや金蓮と経済とが人目をしのんでいちゃつく。

さて、回目を見ると、「詞話本」の方が今回の本旨をよく踏まえていると言える。「繡像本」の「潘金蓮驚いて幽歡を散ず」とは、陳經濟といちゃついている所を人目を気にして途中でやめたことを指す。しかしこのようなことは、本回の筋からすれば枝葉末節のことである。それにもかかわらず回目にこの一句を入れたのは、他の回目と同様に、「繡像本」の編者がより金蓮と経済の密会というものを重視していた為と考えられる。

第五十九回

詞話本 西門慶捧死雪獅子 李瓶兒痛哭官哥兒

繡像本 西門慶露陽驚愛月 李瓶兒睹物哭官哥

この回では、金蓮が日頃飼っていた雪獅子という猫が官哥にかみつき、その為に官哥は数日間の気絶状態の後死亡する。官哥の死とその埋葬とがこの回の最重要テーマである。「詞話本」の回目は、以上の内容を的確に踏まえている。「繡像本」の回目のうち「西門慶陽を露わし愛月を驚かす」とは、この回の始めの方で、西門慶が商売が順調

にいつているのに気を良くし、廓に出かけ、なじみの妓女の鄭愛月と肉交に及んだことを指している。陽とは、言うまでもなく男根のことである。一一の説明は省くが、この外にも「繡像本」の回目には卑猥な言葉が多い。

第六十五回

詞話本 吳道官迎殯頒真客 宋御史結豪請六黃

繡像本 願同穴一時喪礼盛 守孤靈半夜口脂香

この回は、李瓶兒の盛大な葬儀を主な内容としている。従って当然のことながら、「詞話本」の回目も「繡像本」の回目もいずれも一句はこのことに触れている。ところが、李瓶兒の埋葬を終えたあと西門慶は早速官哥の乳母の如意児にいどみ関係をもっている。「繡像本」の回目の「孤靈を守って半夜に脂香を口にす」とは、このことを指している。数日後、西門邸では、都から勅使として花石綱を受けとりに来た六黄太尉の接待が盛大に行われるが、「詞話本」の回目「宋御史豪と結んで六黄を請う」はこの事に触れている。ここでも、「詞話本」の回目では政治的動向により注意が払われているのに対し、「繡像本」の回目では、主に男女関係に注意が払われ、その回目のつけ方も往々下品であることはしばしば指摘する通りである。

第七十四回

詞話本 宋御史索求八仙鼎 吳月娘聽宣王氏卷

繡像本 潘金蓮香腮偎玉 薛姑子仏口談経

この回の前半部は、この度九江知府として赴任する蔡修の歡送会を西門邸で行うことになったことを描く。この為に邸内には山東の諸役人達が賑々しく集まる。後半部は、月娘が薛尼より「黃氏女卷」という仏教説話を聴くという内容である。「詞話本」も「繡像本」も月娘が仏曲を聴いたことに関心を寄せ、回目の一句はこの事に触れるが、別の一句は異なり、「詞話本」の方は、巡按御史の宋喬年が蔡修の歡送会の席上、西門慶の持っている八仙図の鼎を所望したことに触れるのに対し、「繡像本」の方は、金蓮による西門慶に対する性技を指している。この回も他の回と同じように、「詞話本」の回目は、より政治的な面に関心を寄せるのに対して、「繡像本」の方は、閨の睦言のたぐいに関心を寄せ、その回目のつけ方がやはり卑猥である。

以上、紙幅制限の為大部端折つたが、これまで見てきたところをまとめてみると、次のようにならう。

「詞話本」では、第四十八回、第六十五回、第七十四回などに見られるように、往々中央の政界の動きをいしそれに連動する山東役人の動向に注目し、これを回目に盛り込もうとする傾向があるのに対し、「繡像本」では、男女の関係、特に金蓮と敬済との関係に注目し、このことを回目に盛り込もうとする傾向のあることが見てとれた。「繡

像本」では男女関係のことを重視するあまり、時にそれが回の内容としては枝葉末節と思える事柄でも回目に盛り込む傾向すらあり、その回のヤマ場を的確に押さえる点では、むしろ「詞話本」の回目の方が優れているケースが多く見られた。また、「繡像本」の回目には、やや卑猥な内容に言及する傾向も見られた。

二、標題詩の相違について、

「金瓶梅」各回冒頭に掲げられた標題詩に関しては、すでにかつて考察を試み、「話本」と「金瓶梅」⁶⁾とか、「崇禎本」「金瓶梅」各回冒頭の詩詞について⁷⁾として発表したことがある。しかし、どちらも標題詩の出典の解明に大部分の精力を傾け、「詞話本」の編者と「繡像本」の編者が何故その回にその標題詩を掲げようとしたかについての考察にいささか欠ける所があったので、ここに改めてこの点に関して論じてみたいと考える次第である。

まずこの問題を考える前に、「詞話本」と「繡像本」の各回の標題詩を対照させ、また、すでに考察済みではあるが、それぞれ出典のわかっているものについては出典を以下に挙げると、表IIのようになる。

表II

回数	詞話本	出典	繡像本	出典
1回	丈夫双手把吳鉤(眼兒媚)	宋・卓田作	豪華去後行人絶(七言詩)	梁辰魚作
2回	月老姻緣配末真(七言詩)		芙蓉面(孝順歌)	

32回	常言富者貴之基（七言詩）
31回	家富自然身貴（？）
30回	得失榮枯總是閑（七言詩）
29回	百年秋月与春花（七言詩）
28回	風波境界立身難（七言詩）
27回	頭上青天自恁欺（七言詩）
26回	閑居慎句說無妨（七言詩）
25回	名家台柳綻群芳（七言詩）
24回	銀燭高烧酒乍醺（七言詩）
23回	行動不思天理（？）
22回	巧厭多勞拙厭間（七言詩）
21回	脈脈傷心只自言（七言詩）
20回	在世為人保七旬（七言詩）
19回	花開不拈貧家地（七言詩）
18回	堪嘆人生毒似蛇（七言詩）
17回	記得書齋午會時（鷓鴣天）
16回	傾城傾国莫相疑（七言詩）
15回	日墜西山月出東（七言詩）
14回	眼意心期未即休（七言詩）
13回	人生雖未有十全（七言詩）
12回	堪笑西門暴富（六言詩）
11回	婦人嫉妬非常（六言詩）
10回	朝看瑜伽經（五言詩）
9回	色胆如天不自由（七言詩）
8回	静悄房櫳独自猜（七言詩）
7回	我做媒人笑可能（七言詩）
6回	可怪枉夫恋野花（七言詩）
5回	参透風流二字禪（七言詩）
4回	酒色多能悞国邦（七言詩）
3回	色不迷人人自迷（七言詩）

「水」	21回
「水」	24回
「水」	26回
「水」	25回
「水」	26回
「水」	45回
「水」	7回
類13・82回	
「水」	53回
「水」	33回
「水」	7回
73回再出	
宋・邵堯夫作	
「水」	8・27回
「秦王詩話」	

乍對不相識（五言詩）
璇闈綉戶斜光入（七言詩）
同上
別後誰知珠分玉剖（懶画眉）
同上
紅曙卷窗紗（？）
感郎耽夙愛（五言詩）
八月中秋（踏莎行）
六街簫鼓正喧闐（七言詩）
可憐獨立樹（五言詩）
綉面芙蓉一笑開（山花子）
同上
樓上多嬌艷（五言詩）
同上
早知君愛歇（五言詩）
有個人人（柳梢青）
人靡不有初（五言詩）
步花徑（掃洞仙）
并刀如水（少年遊）
今宵何夕（桂枝香）
心中難自泄（梧桐樹）
ほぼ同じ
蹴罷鞦韆（点絳脣）
与君形影分吳越（七言詩）
錦帳鴛鴦（好女兒）
幾日深闈綉得成（七言詩）
新涼睡起（点絳脣）
十千日日索花奴（浣沙溪）
幽情憐独夜（五言詩）
牛馬鳴上風（五言詩）

唐寅作「秋闈」
宋・李清照作
宋・周邦彥作
梁辰魚作
宋・周邦彥作
梁辰魚作
宋・周邦彥作
楊慎作「佳人」

33回 人生雖未有前知 (七言詩)
 34回 自恃官豪放意為 (七言詩)
 35回 莫入州衙与果衙 (七言詩)
 36回 富川遙望劍江西 (七言詩)
 37回 吳統輕舸更遲々 (七言詩)
 38回 麗質溫柔更老成 (七言詩)
 39回 漢武清齋夜築壇 (七言詩)
 40回 善事須好做 (五言詩)
 41回 富貴双全世業隆 (七言詩)
 42回 星月当空万燭燒 (七言詩)
 43回 細推今古事堪愁 (七言詩)
 44回 窮途日日困泥沙 (七言詩)
 45回 佳名号作百花王 (七言詩)
 46回 帝里元宵 (?)
 47回 風擁狂瀾浪正顛 (七言詩)
 48回 知危識險 (格言)
 49回 寬性寬懷過幾年 (七言詩)
 50回 天与胭脂点絳唇 (七言詩)
 51回 羞看鸞鏡惜朱顏 (七言詩)
 52回 海棠深院雨初收 (七言詩)
 53回 人生有子万事足 (七言詩)
 54回 来日陰晴未可商 (七言詩)
 55回 千歲蟠桃帶露攜 (七言詩)
 56回 斗積黃金侈素封 (七言詩)
 57回 本性円明道自通 (七言詩)
 58回 綉幃寂寂思懣懣 (七言詩)
 59回 日落水流西復東 (七言詩)
 60回 赤繩緣尽再難期 (七言詩)
 61回 去年九日愁何限 (七言詩)
 62回 行藏虛実自家知 (七言詩)

類13・87回

「秦王詩話」

「水」65回

「宣和遺事」

衣染鶯黃 (意難忘)
 成吳越 (川潑棹)
 娟娟遊冶童 (五言詩)
 既傷千里目 (五言詩)
 淡粧多態 (薄倖)
 銀筆宛轉 (綿搭絮)
 同上
 種就藍田玉一株 (山花子)
 瀟洒佳人 (滿庭芳)
 同上
 情懷增悵望 (滿庭芳)
 昼日移陰 (滿江紅)
 徘徊 (玉蝴蝶)
 小市東門欲雪天 (浪淘沙)
 懷壁身堪罪 (五言詩)
 碧桃花下 (桂枝香)
 雅集無兼客 (五言詩)
 欲掩香幃論繾綣 (菊花新)
 同上
 青樓曉日珠簾映 (七言詩)
 小院間階玉砌 (応天長)
 美酒斗十千 (浪淘沙)
 節表方簪遇 (喜遷鶯)
 清河豪士天下奇 (七言詩)
 野寺根石壁 (五言詩)
 愁旋積 (帝台春)
 楓葉初丹榭葉黃 (七言詩)
 倦睡懣懣生怕起 (臨江仙)
 蛩声泣露驚秋枕 (菩薩蠻)
 玉釵重合兩無緣 (七言詩)

宋・周邦彦作
 王穉登作

類唐・魏徵詩
 宋・賀鑄作

宋・胡浩然作

宋・秦觀作

宋・周邦彦作

宋・柳永作

南唐・張泌作

沈仕作《閨怨》

宋・柳永作

吳遵巖作

吳遵巖作

宋・康与之作

李甲作《春眠》

秦公庸作

宋・秦觀作

- 63回 十二瑶台七宝欄（七言詩）
- 64回 着人情思覺初闌（七言詩）
- 65回 齊眉相見喜柔和（七言詩）
- 66回 八面明窓次第開（七言詩）
- 67回 終日思卿不見卿（七言詩）
- 68回 雪压残紅一夜凋（七言詩）
- 69回 信手烹魚覓素音（七言詩）
- 70回 昨夜西風鼓角喧（七言詩）
- 71回 暫時罷鼓膝間琴（七言詩）
- 72回 寒暑相推春復秋（七言詩）
- 73回 巧厭多乖拙厭間（七言詩）
- 74回 昔年南去得娛賓（七言詩）
- 75回 万里新墳尽十年（七言詩）
- 76回 動靜謀為要三思（七言詩）
- 77回 飛彈參差拂早梅（七言詩）
- 78回 黃鐘心律好風催（七言詩）
- 79回 仁者難逢思有常（七言詩）
- 80回 寺廢僧居少（五言詩）
- 81回 万事從天莫強尋（七言詩）
- 82回 記得書齋作會時（七言詩）
- 83回 堪笑西門識未通（七言詩）
- 84回 冬夏長青不世情（七言詩）
- 85回 人家養女甚無聊（七言詩）
- 86回 人生雖未有不全（七言詩）
- 87回 平生作善天加福（七言詩）
- 88回 上臨之以天鑑（六言詩）
- 89回 風拂烟籠錦旆揚（七言詩）
- 90回 花開花落開又落（七言詩）
- 91回 百歲光陰疾似飛（七言詩）
- 92回 暑往寒來春復秋（七言詩）

「懷春雅集」

「懷春雅集」

「懷春雅集」

「懷春雅集」
22回既出

「古今」29回

邵堯夫詩
「繡像本」95回

（類）13・17回既出
18回既出

（類）13回

「水」3回

- 香奩美人違（五言詩）
- 王頌殊沈思悄然（七言詩）
- 湘臯烟草碧紛紛（七言詩）
- 胸中千種愁（卜算子）
- 朔風天（蘇幕遮）
- 鍾情太甚（翠雲吟）
- 香烟裊（憶秦娥）
- 帝曰簡才能（五言詩）
- 花事闌珊芳草歇（蝶恋花）
- 掉臂盪肩情態（勝長天）
- 喚多情（長相思）
- 富貴如朝露（五言詩）
- 双双蛺蝶繞花深（七言詩）
- 相勸頻携金粟杯（七言詩）
- 梅共雪（望江南）
- 鳳髻金泥帶（南歌子）
- 人生南北如岐路（青玉案）
- 倚醉無端尋旧約（七言詩）
- 燕入非傍舍（五言詩）
- 聞道双啣鳳帶（西江月）
- 如此鍾情古所稀（七言詩）
- 一自当年折鳳凰（七言詩）
- 情若連環終不解（？）
- 雨打梨花倍寂寥（七言詩）
- 悠悠嗟我里（五言詩）
- 夢中雖暫見（五言詩）
- 佳人命薄（翠樓吟）
- 菟絲附蓬麻（五言詩）
- 簾展湘紋浪欲生（七言詩）
- 猛虎馮其威（五言詩）

北宋・徐俯作
林鴻作「留別」
林鴻作「留別」

蘇軾作「離別」

祝允明作

明・馮琦作
宋・歐陽修作
金・吳彥高作

蘇軾作

明・丘濬作

93回	誰道人生運不通 (七言詩)		
94回	花開不拈貧家地 (七言詩)	「水」 33回	
95回	有福莫享尽 (五言詩)		
96回	裏虛外実費張羅 (七言詩)		
97回	在世為人保七旬 (七言詩)	20回既出	
98回	心安茅屋穩 (五言詩)	「水」 30回	
99回	一切諸煩惱 (格言)	「水」 57回	
100回	人生切莫待英雄 (格言)		
			階前潜制淚 (五言詩) 骨肉傷殘產業荒 (七言詩) 寺廢僧居少 (五言詩) 人生千古傷心事 (青衫濕) 追悔当初辜深願 (風銜杯) 教坊脂粉洗鉛華 (七言詩) 白雲山 (蘇幕遮) 旧日豪華事已空 (七言詩)
			「詞話本」 80回 金・吳彦高作 柳永作「閨怨」 劉基作「傷往」

(注、表中「水」とあるのは「水滸伝」の略、「古今」とあるのは「古今小説」の略である。)

表IIを見て、すぐに気づかれるのは、次の四点である。

1、「詞話本」の標題詩には七言詩が多いのに対して、「繡像本」の標題詩には比較的詞が多い。

2、「詞話本」の標題詩には、「水滸伝」からの借用が多い。

3、「繡像本」の標題詩にも先人の作よりの借用が多く、宋人の詞のほかに、明人の詞もあること。

4、「繡像本」が「詞話本」の標題詩をそのまま採用している回(5・7・14・16・24・39・42・51)があり、それは主に作品の前半部にかざられていること。

「詞話本」の標題詩に多く特徴的なことの第一は、その回の内容とは直接関係のない人生訓的な教訓詩が多いことである。例えば、

(一) 十九回(類似九十四回)

花開不拈貧家地 月照山河処処明
世間只有人心歹 百事還教天養人
痴聾瘖啞家豪富 伶俐聰明却受貧
年月日時該載定 算來由命不由人

訳

貧しい家にも花は咲き、山にも川にも月は照る
人の心がわるいだけ、これもやっぱり天のわざ
のろまの家は栄えても、かしこい人はびんぼする
生まれた月日で万事がきまり、よろず何事運次第

(二) 二十回(類似九十七回)

在世為人保七旬 何勞日夜弄精神
世事到頭終有悔 浮華過眼恐非真
貧窮富貴天之命 得失榮華隙裏塵

不如且放開懷樂 莫使蒼然兩鬢侵

訳

人のいのちも七十年、あくせくなさるな日ごとに夜ごと

何をしたとて悔がくる 派手な暮らしも嘘の皮

富むも富まぬも運賦に天賦 榮耀榮華は隙間の塵さ

いつそ気ままに楽しんで 白髪ふやさぬ算段なされ

(三)、四十九回

寛性寛懷過幾年 人死人生在眼前

隨高隨下隨緣過 或長或短莫埋怨

自有自無休歎息 家貧家富總由天

平生衣祿隨緣度 一日清閑一日仙

訳

浮世幾年ゆつたり暮らせ 死ぬも生きるもつい目の先よ

高い低いも運賦にまかせ、短い長いで泣きごといな

有つても無くても溜息つくな、富むも貧乏もお天道しだい

着もの食べものみな縁のもの のんびり暮らせばその日が仙人

このほかに、3・15・22・26・27・28・29・30・33・40・43・44・

48・54・73・75・76・79・86・90・91・92・93・94・95・97・98・99

の各回の標題詩は、おおむねその回の内容と関係のない教訓詩である。

その教訓の内容は、今挙げた例でもわかるように、貴賤貧富は運命であるからあくせくするのは愚かなこと、運を天にまかせて気ままに暮

すのが一番という主旨のものが最も多く、次にこの世は諸行無常かつ無常迅速であるのでやはり気楽に暮すべきであるとする。しかし、富貴に対する欲望や色欲はほどほどがよく、万事淡泊がよい、総じて心の安寧こそ肝心だと説く。「詞話本」の標題詩に繰返し書かれた以上の人生観処生観は、恐らく、「詞話本」の編者のそれが反映されたものと考えられる。ところが、このような人生観は、万暦時代に巷間に流行していた「清言」の内容にそっくりであることから、この「詞話本」の編者は「清言」の影響を強くうけた人物かと思われるが、これ以上のことはまだ不明である。さて、ここでもしこの「詞話本」の編者が「金瓶梅」の原作者と同一人物ならば、いささか矛盾が感ぜられるであろう。なんとすれば、「金瓶梅」というこの作中で「詞話本」の編者が理想とするような人物は、強いて言うならば呉月娘ぐらいで、登場人物の大半が自らの欲望を目一杯に追求し、しかも目前の損得にのみ心を奪われる俗人ばかりだからである。しかし、この問題は簡単に断を下すのは危険で、今は、「金瓶梅」の原作者(X)と「詞話本」の編者(Y)が別人の可能性を指摘するにとどめておきたい。

第二に、「詞話本」の標題詩の中には、単にその回に描かれた季節に因んで掲げられたと思われるものも見うけられ、例えば、46回は単に元宵節のことを、52回は初夏の季節を、70回は冬の季節を、78回は新春の季節を、89回は清明節をそれぞれ詠んだ詩詞にすぎない。

これに対して、「繡像本」の標題詩に特徴的なことの第一は、ある婦女子の気持を代弁するかの如きものが多いことである。但しこれは詞の特性からと思われるが、その大部分が連想に基づいたものであつ

たり、暗示的なものであつたりして、本當の所、誰のどのような氣持を詠んでいるのか判然としないものも少なからずある。次に二例ばかり見てみよう。

四、三十一回

幽情憐独夜 花事復相催

欲使春心醉 先教玉友来

濃香猶帶膩 紅暈漸分腮

莫醒沈酣恨 朝雲逐夢回

訳

一人寝のわびしき思い、花だより相継ぎやまず。わが心酔わんと欲す、先ず酒をばもち来れ（玉友は酒の別称）。濃き香りはいたくかおりにて、飲めば頬はあつく火照る、ひたすら酔ひひたりて恨みを云えど、醒めし後の空しさよ。

この回は、慶が季瓶児との間にもうけた一子官哥の一カ月の祝いを盛大にやることを内容としている。この詩は、孤閨に悩み、酒でまぎらわす婦女子の氣持をうたつたものである。この回の内容と重ねると、この詩は、西門慶が季瓶児ばかりを寵愛し、自分の方にはちつとも目をむけてくれないと悩む金蓮の怨恨の氣持をうたつたものと解される。

五、二十三回（「梧桐樹」詞）

心中難自泄、暗裡深深謝。未必娘行、恁地能賢哲。衷腸怎好和君説。説不願丫頭、願做官人的侍妾。他堅牢望我情真切。豈想風波、

果底了心料者。

訳

心に深くもの思い、ひそかに謝するこの思い、奥さま方はどうして許してくれようか、してまた、あなたにこの苦しみをどう伝えたらよいのでしょうか。下女などではなく官人の侍妾にと固く望みたいが、あの人が真剣に私を想っているからは、なんで波風なぞ立とうぞ、きつとうまくゆくはず。

この回は、西門慶が下男来旺の妻の宋惠蓮と通じ、金蓮がこれを窺い知るを内容とする。この内容とこの詞とを重ねると、この詞は明らかに夫に内密に西門慶に身を許してしまつた宋惠蓮のゆるる氣持を詠んだ詞であることが判る。惠蓮にしてみれば、主人に愛されてしまつたが、まだ身分は不安定であり、夫やまわりの奥さま方の目が気になる。たよりとするのは主人慶の愛だけだといふ彼女の不安な氣持を詠んでいる。

以上例として挙げたものの外に、潘金蓮の心を代弁したと思われる詩詞としては、38・43・48・58・73・86回のもが挙げられ、季瓶児の心の代弁としては、17・19・44・59・61回のもが挙げられよう。また、宋惠蓮の心を代弁するものとしては、例に挙げた23回の外に、26回のもが挙げられる。

「繡像本」の標題詩に特徴的なことの第二は、官能的内容のものが多いことである。ここでは一々敢て例を挙げないが、22回の詞は慶と宋惠蓮の、27回と29回の詞は慶と金蓮の、37回と50回の詞は慶と王六

児との、69回と78回の詞は慶と林夫人との、75回の詩は慶と如意との、また52回の詩は金蓮と陳敬濟とのそれぞれ情事の様子を詠んだものである。

さて、「詞話本」の標題詩と「繡像本」の標題詩を比べてみると、結局同じことを詠んでいる回もある。例えば、

(六)、第七十九回、「詞話本」の標題詩

仁者難逢思有常 閑居慎勿恃無傷
爭先徑路機閑惡 近後語言滋味長
爽口物多終作病 快心事過必為殃
与其病後能求藥 不若病前能自防

訳

とかく仁者は日ごろを思う、ひまなからだも気をゆるめるな
先を急げばつまづくもので、はたの注意は味がある
食も過ぎれば病のもとで、楽しみ果てればわざわい起ころ
病んで薬を求めるとは、転ばぬ先の杖と知れ

(七)、これに対する「繡像本」の標題詩は、

人生南北如岐路、世事悠悠等風絮、造化弄人無定據、翻來覆去、
倒橫直豎、眼見都如許。到如今空嗟前事、功名富貴何須慕、坎止
流行隨所寓。玉堂金馬、竹籬茅舍、總是傷心処。（「青玉案」詞）

訳

人生は南北の別れ道、世の事は風に舞う柳わた。幸せはくつがえ
りまろび転がり、見ての通りすべてかくの如く頼りなきかな。今

にして往事を思えば、功名富貴が何になる、時流に棹さし險に遇
えば止ればよかつたものを。玉堂・金馬・竹籬茅舍も、なべてこ
れ悲しみのもと

この79回は、西門慶が重病にかかって死亡する段である。「詞話
本」の標題詩は、西門慶の、「業極生悲」の人生をよく総括しており
人生訓的なものである。「繡像本」の標題詩も西門慶の人生を総括し
ている点では「詞話本」の標題詩と同じことを言っているが、西門慶
が生前せつせと追求した功名富貴は砂上の楼閣であつたことに対して
感慨の気持をもってこれを詠んでいる。同じことを詠んでも、
「詞話本」の方は、天の立場から人間を譴責するが如きなのに対して、
「繡像本」の方は、登場人物の立場に立つてその立場や気持に同感・
同情しながら詠んでいる。

以上、長々と「詞話本」と「繡像本」の回目と標題詩における相違
を見てきたが、回目の上においても標題詩の上においても、その相違
に共通の傾向のあることが判る。つまり、「詞話本」の回目には回の
プロットのうち政治的動向に関心を注ぎ、一方標題詩においては、そ
の回のプロットとは関係のない人生訓的な詠嘆が多かつた。これに対
し、「繡像本」の回目には、男女間のトラブル、特に金蓮と敬濟の関
係に関心を注ぎ、また標題詩においては、婦女子の気持を代弁する詞
が多かつた。また、「繡像本」の回目の中には卑猥な内容のものも散
見したが、標題詩にも官能的なものが見られた。これら相違を、すで
に確認したように「詞話本」の標題詩には七言詩が多く使われている

のに対し、「繡像本」の標題詞に詞が多いのとあわせて考えるならば、少なくとも、「詞話本」の編者(Y)と「繡像本」の編者(Z)とは、恐らく同一人物ではなく、回目や標題詩にそれぞれ編者の嗜好の相違が反映したと考えるべきではないかと思うものである。

むすび

「金瓶梅」の原作者(X)、「詞話本」の編者(Y)、「繡像本」の編者(Z)はそれぞれ誰であるか。これまで、X氏については、王世貞説・李開先説・屠隆説・賈三近説等々あり、またZ氏については馮夢龍説等が挙げられているが、最も関心の持たれるこの謎について、未だ万人を肯首せしめる結論が出ていないのが現状である。

一方、かつて特にX氏とY氏に関して、上記のように後世に名を残した大名士ではなく無名で失意の下層文人であったに相違ないという説が出されたことがあった。その代表が孫遜氏と陳詔氏の共同執筆になる『《金瓶梅》作者非「大名士」説―從幾個方面「内証」看《金瓶梅》作者―』なる論文で、その証拠として、

1、「詞話本」の回目の中には、字数の揃ってないものがあつたり、対仗も整ってないものが見られること。

2、「詞話本」の標題詩の中に他人の作の剽窃がかなりあること。

3、標題詩の中には、失意にある者が自らを慰めるかのような内容のものがあること。

の三点を挙げて、「金瓶梅」の作者は、少なくとも文学素養の充分な大名士ではなく、恐らく出世の道から外れて落魄した無名の文人で

はなかつたかとされた。但し、この両氏の論文では、筆者のいうX氏とY氏との区別が明瞭でなく、恐らく同一人物だという前提で論ぜられてゐる。

孫・陳両氏によるこの論は、なかなか説得力があるが、筆者は、X・Y・Zそれぞれがまだ相当な文人―少なくとも今日その名前を追跡する―の可能性は残っていると考える。まず、「詞話本」の回目の中に字数の揃ってないものがあつたり対仗も整ってないものが見られる点についてだが、知られる通り、現存する「詞話本」というテキストは、全書誤字や当て字の大変多いテキストである。これはまったくの想像だが、このテキストがなんらかの理由で倉卒の間に編刊せざるを得なかつた為に、このテキストの編者Yが、誤字や当て字の外に回目的字数や対仗の不揃いを黙過したとも考えられるし、たとえ、Y氏が文学素養の低い無名の文人だとしても、それが即「金瓶梅」の原作者(X)と同一人物であつたという証拠はいまだにないのである。

「金瓶梅」の中に、北宋末や明の嘉靖間に実在した人物の名前が出てくる。筆者はかつて、Xはこれら人物名に政治的諷刺や独特の洒落を込めることによつて、彼が予想した読者とともにそれを楽しむことのできた人物ではなかつたかと論じたことがあるが、今でも筆者は、X氏をかかなりの文人であつたはずだと考えている。2の標題詩の中に他人の作の剽窃が多いので、Xは一流の文人ではないだろうという論も、当たらないと考える。そもそも、これまでX氏の候補として挙げられている王世貞の「四部稿」や李開先の「問居集」、屠隆の「栖真館集」を目を皿のようにして通読しても、その中に一言も「金瓶梅」の

ような白話小説に言及している個所はないのである。今挙げた三人は、まるで白話小説など一度も読んだことがなかった、ましてや、それに筆を染めたことなど絶えて無かつたかのようなのである。しかし、實際の所彼らが白話小説に筆を執つたかどうかは別として、一度も白話小説を見たことがなかったとはとても考えられない。つまり、当時の文人の意識の中には、白話小説のような俗な事柄は雅であるべき詩文集の中に一切入れるべきでないと考えていたものと思われる。これに対し、作中に様々な先人の詩文を勝手に入れるというのが実は宋の講釈師以来の白話小説の伝統⁽¹²⁾なのである。文学素養豊かな文人は、自らの文学的才能を充分に發揮して作つた詩は、名前をつけて公開される自らの詩文集に収め、一方、白話小説に筆を執つては、その伝統に従つて他人の詩を勝手に盛り込んだということは大いに可能性のあるところであろうと考えるのである。

以上、「詞話本」の編者(V)と「繡像本」の編者(Z)のそれぞれの嗜好の相違というものを、回目や標題詩から見てきた。依然として、XYZの正体が明らかになつたわけではないが、今後それぞれを追求する手掛かりになつたかと考える。

最後に、文中でも解れたように、「詞話本」の標題詩の中には、明代中期以降流行した「清言」と同様の考えが見られるが、このつながりについては、まだ明らかでないので、今後の課題としたい。また、文中では、ほとんど解れなかつたが、「繡像本」には各回に二葉、全二百葉の絵がついている。「繡像本」の回目は、これら絵に対応しているので、この回目と絵の関係について考える必要がある。この点に

ついてはまだ考えがまとまつていない。これも、今後の課題としたい。

注

- (1) 「中国の八大小説」(昭和四十年、平凡社刊)第一部「近世小説の文学・言語とその時代」頁21には、各回冒頭に置かれる詩詞のことを「標題詩」と呼ぶとあるので、本稿では、これに従う。
- (2) 少なくとも、「金瓶梅」の作者として、このXYZの三人を想定する考えは、平成十一年度中国古典小説研究会夏合宿で大塚秀高氏が提唱されたものである。筆者も同意見であり、本稿においてこの想定を採用したい。
- (3) 長編小説を回に分け、各回に七言二句の回目をかかげるようになったのはいつごろからか判然としないが、遅くとも、万曆初年あたりには始まつていたものと思われる。例えば、口語長篇小説のうち最もその刊行が早いと思われる嘉靖元年刊行の通称弘治本「三国志通俗演義」を見ると、全書を二十四巻に分け、各巻は更に十則に分けられ、各則ごとに七言一句の題がつけられているが、まだ七言二句にはなつていない。
- (4) 「中国の八大小説」前掲書第一部中国近世小説序説頁21に見える伊藤漱平氏による注(三)を参照されたい。
- (5) 「詞話本」における陳經濟は、「繡像本」では陳敬濟と書き表わされる。
- (6) 「長崎大学教養部紀要」人文科学篇第30巻第2号所収、(一九九〇年一月)
- (7) 「長崎大学教養部紀要」人文科学篇第33巻第1号所収(一九九二年七月)
- (8) 「詞話本」の訳文は、平凡社「中国古典文学大系」の小野忍・千田九一訳による。
- (9) 明代中後期に流行した儒仏道三教合一による心の安寧を説く書物のこと、洪応明「菜根譚」・陳繼儒「太平清話」・屠隆「娑羅

館清言」等がある。

(10) 「上海師大報学」一九八五年三期所収

(11) 拙稿『金瓶梅』に於ける諷刺と洒落について』長崎大学「国語と教育」第十九号 一九九四年を参照のこと。

(12) 例えば、既に「金相平語五種」などには、胡曾の「詠史詩」が頻繁に使われていることはよく知られている所である。

※ 本論文は平成十年度佛敎大学特別研究助成を受けたものである。

(あらかし たけし 中国文学科)

一九九九年十月十五日受理